
日本の経営者の精神的支柱 木川田一隆氏 逝く

経済同友会最高顧問（前代表幹事、東京電力取締役相談役）の木川田一隆氏は、3月4日（金）午前9時2分、背椎しゅようのため入院中の東京新宿区信濃町・東京電力病院で逝去された。享年77才。

木川田一隆氏の葬儀・告別式は、3月14日（月）午後零時30分より、東京港区南青山の青山葬儀所で神式により東京電力社葬としてしめやかに行なわれた。

告別式は、同葬儀所始まって以来最高の1万人余が白と黄色の菊の花に飾られた木川田氏の遺影に対し、古式にのっとり玉ぐしを捧げ故人の遺徳をしのんだ。

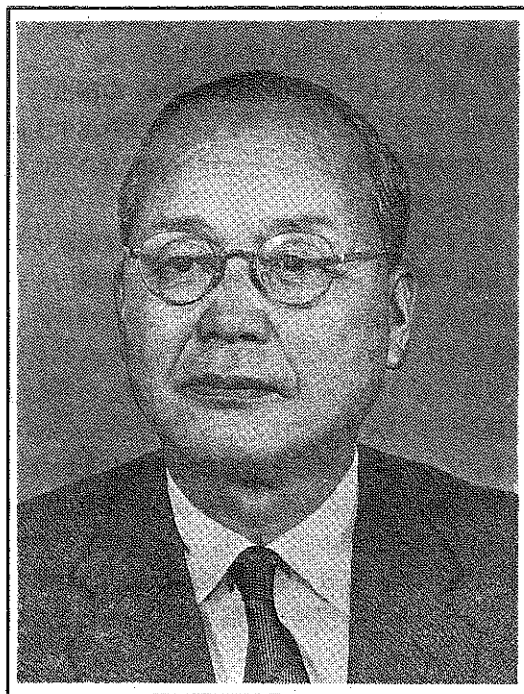
経済同友会からは佐々木直代表幹事はじめ会員多数が参列、佐々木代表幹事は別項のごとく日本の経営者の精神的支柱であった木川田氏の業績を偲ぶとともに、「いかに多くの人々があなたの暖かい心づかいに感謝の念を持ちつづけていることでしょうか」と故人の遺徳をたたえ、深甚なる弔辞を述べた。

会葬者には政界から福田首相、三木前首相、大平自民党幹事長、経済界から土光経団連会長、桜田日経連会長など多数が、この他学界・言論界など各界から多彩な参列者の列が続いた。

経済同友会は、4月26日、日本工業倶楽部で開催の昭和52年度通常総会において、木川田一隆氏を追悼して、中山素平終身幹事が追悼の演説（別項）を行ない、重ねて弔意を表した。



経済同友会は、3月4日、かけがえのない木川



木川田一隆氏

田一隆最高顧問（前代表幹事）の訃報に接した。

木川田一隆氏は、昭和38年から12年間、代表幹事2人制時代を含め14年間、50年4月に佐々木直氏にバトンタッチするまで代表幹事の座にあり、いわゆる「経済同友会—木川田時代」を築いた。

「木川田時代」同友会は、日本経済が高度成長の反省期の段階にあり、時代を先取りする“新しい経営理念”の執拗な追求から始まった。それは客観的情勢の推移を見極めつつ、経済社会の要求を先見的に把握、慎重な考察を加えたのち、新しい前進目標—理念—を見出すものであった。

それが年初の「年頭見解」で、また総会におけ

る「代表幹事所見」で掲げられた。

39年には『前進のための構造調整』、『協調的競争への道』の名の下に、過当競争を戒め、40年には『転機に立つ経営者の自覚と実践』で「企業の質的強化」と「安定成長」を打出し、『新しい自由企業体制の確立』を叫んだ。

42年には「産業福祉社会」を標榜、44年の年頭見解は『進歩と調和への新秩序の形成』と題して「人間尊重の社会」形成を強調、45年には『人間主義に立つ進歩と調和社会の建設』、『新時代に処する世界政策の形成』、『70年代の日本の新路線』を掲げた。

弔 辞

木川田さんのみたまにつつしんで申し上げます。

昨年秋以来、お身体の不調を訴えておられた木川田さんが、一日も早く私たちの間に帰ってこられ、あのおだやかなまなざしで、格調の高い話を聞かせて頂けるのを待っていましたのに、今やその願いは空しいものとなりました。

あなたは、東京電力の経営に精魂を傾けられ、そしてわが国電力界の発展に尽瘁されるとともに他方永年、経済同友会代表幹事として、経済界を指導されました。日本の経営者の精神的支柱として、まことに大きな存在だったのであります。

あなたは政治、経済、社会および世界のはるか長期的な変化を深く洞察し、経営者の意識革新を求めて来られたのでした。しかも一貫して自由と進歩を願ひ、そのため経営者の責任の自覚を呼びかけ、秩序形成の行動を促すというのが思想の軸となっておりました。

あなたの予見されたことは、時がたつに伴い必ず現実の問題となり、人々を驚嘆させたのでした。経営者の主体性といい、協調的競争といい、人間主義の経済といい、あるいは量より質への転

石油ショック直前の48年度の所見では「企業と社会の対置の発想」を捨て、「企業と社会との一体化」を標榜、「経営者の社会的責任」の新次元を画した。

対外面においても、米CED、独CEPESなど欧米の進歩的団体と密接な連携を図り、数多くの共同研究を進め、「世界経済の新秩序形成」に努めた。

「進歩と調和の求道者」として、高き理想を掲げ行動した、木川田一隆氏に対し、心から哀悼の意を表する。

代表幹事 佐々木 直

換といい、ことごとく日本が直面する問題となっております。

また円切上げについてのご提案は当時、一種のタブー視されたものへの挑戦でしたが、程なくスミソニアン協定の成立となりました。

石油危機の到来をいち早く見抜き経済界に警告されたのもあなたでした。その鋭い先見性に対してはただただ頭が下るばかりであります。

外に向っても、あなたは確固たる世界観にもとづいて行動し、大きな足跡を残されたのであります。経済同友会が世界の同友会になったのは、あなたがアメリカの経済開発委員会と友好関係を築いたのがはじまりであります。

その後、ヨーロッパあるいはアメリカ中西部に沢山の友人をつくり、また東南アジアにも深い理解を寄せ、民間外交の実をあげられたのでした。中国との国交回復促進についても堅く決意し、病躯をおして寒い月の北京に渡られたのでした。

とくにここで申し上げたいことは、このような数々の功績の背後に輝いている木川田さんの人柄であります。いかに多くの人々が、あなたの暖い心づかいに感謝の念を持ちつづけていることでし

ょうか。人々を大きく包む独特な持ち味が、経済界の指導者木川田さんを、他の追従を許さぬものにしていたのであります。

日本経済は内外にわたり、重大なときにあります。あなたの信念だった安定成長路線への転換がむづかしい段階にあるとき、あなたが元気でおら

れたらと思うと本当に残念でたまりません。しかしあなたの思想と精神は必ず私たちのなかに生きてゆくことを固く信じております。

木川田さんのご冥福を心からお祈りし、哀悼の意を表します。

木川田一隆氏を偲ぶ

——52年度総会における追悼要旨——

終身幹事 中山素平

木川田さんが亡くなられてから2カ月、そのショックは薄らいでくるが、同友会総会において木川田さん独特の格調ある「代表幹事所見」を想い出し追憶を新たにする。

「経済往来」5月号で中山伊知郎氏が木川田さんを偲んで、“資本主義を最後に守った人”と表現している。シュムペーターも述べているように、資本主義が成熟すると内部から蝕ばれ正常に作動しなくなり、社会の各方面から批判が出る。このため、資本主義を守るためには自ら守ろうとする気概が必要となり、まさにこの気概を持った1群の人々のなかの1人が木川田さんである。日本において資本主義を守った人は、一方において故石坂氏がおり、もう1人が木川田さんであろう。

自分で身をもって資本主義を守るためには、常に問題意識を持っていなければならない。木川田さんのなかにある自由主義経済は、改めるべき点

は改めるという広さを持っていた。このなかから木川田さん独特の“企業と人間”、“企業と政府”、“企業と社会”の関係が生まれてきたものである。

とくに、“企業と学問もしくは大学”の関係を本当に理解していた人である。さらに、“企業と国際社会”の関係を先見的にとらえ、各面から識見ある見解を示された。木川田さんは同友会を嚆として自由社会を守ってきた人である。

今、我々は木川田さんを失って、佐々木代表幹事を中心として困難な時代に立ち向わなければならない。木川田さんの「所見」では“自主的”、“主体的”という言葉を好んで使われていたが、佐々木代表幹事を中心にして、自主的、主体的に同友会を守ることが我々の使命である。

同友会に14年間尽くし、また日本経済のために尽くした木川田さんに心から冥福を祈りたい。